

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

| | | | |
|---------------------|---|------|-----|
| 機 関 名 | 早稲田大学 | 拠点番号 | D19 |
| 申請分野 | 人文科学 | | |
| 拠点のプログラム名称 (英訳名) | アジア地域文化エンハンシング研究センター Research Center for Enhancing Local Cultures in Asia | | |
| 研究分野及びキーワード | 〈研究分野: 史学〉(地域文化)(中国文明)(デジタル資料)(国際共同調査)(文化遺産) | | |
| 専攻等名 | 文学研究科芸術学(美術史)専攻、史学(東洋史)専攻、史学(考古学)専攻、中国文学専攻、史学(日本史)専攻、日本語日本文化専攻、東洋哲学専攻、中国古籍文化研究所 | | |
| 事業推進担当者 | (拠点リーダー) 大橋 一章 教授 他 21名 | | |

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成16年1月現在)を抜粋

＜本拠点がカバーする学問分野について＞

【四川モデルの形成】東洋美術史、仏教美術史、中国史、儒学思想史、朝鮮史、東アジア史、中国文学、中国語学、中国宗教史、【地域文化への応用】東アジア考古学、西アジア考古学、北アジア史、日本史、日本思想史、仏教思想史、【理論モデルの検証】文化人類学、東南アジア地域研究

＜本拠点の特色及びその目的等＞

本センターは、アジアの“地域文化”を“中国文明”の視座から考察し、従来十分には評価されてこなかった地域文化の価値を新たな次元から見直すと共に、その資料を海外の研究機関と協力して収集し、かつそのデジタル化によって資料を共有し、アジア文化研究の国際的拠点を構築する。

＜COEを目指すユニーク性＞

従来の伝統的な文化研究は、~~高~~、~~美~~、~~的~~で、その意味で突出したハイカルチャーを~~象~~としてきたが、本センターでは文化の社会性に着目し、もともと日常社会に存在した、普通のローカルカルチャーを研究対象とする。それらの資料は残りにくいものなので、それをデジタル化することによって記録し、後世に伝える。その意味で物(資料)それ自体を収集する博物館型の文化研究とは根本的に異なり、デジタル画像を通して研究するところに最大の、かつ画期的な特徴がある。

＜本拠点のCOEとしての重要性・発展性＞

アジア各地の地域文化に関する資料を効果的・組織的に収集するため、本拠点は海外の研究機関と種々のネットワークを構築している。例えば長江流域文化研究所ではいち早く中国武漢大学内に“楚文化与楚地出土文献合作研究中心”を設立、赤外線フレトグラフィ用カメラシステムによる~~出土~~文字資料の共同研究を行い、資料のテキスト化と共同出版を実現しつつある。本拠点は日本の人文科学分野における国際共同研究のモデル、または牽引車としての役割を果たすであろう。

＜本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果＞

本拠点では既存の大学院内に専門にアジア地域文化を研究するための単一専攻、もしくはそれを細分した専攻を複数作り、それを束ねる一つの研究科を設置し、“アジア文化学”を研究するための~~先端~~教育プログラムを構築する。折しも早稲田大学文学部では本プログラム終了の翌年に新学部を立ち上げる準備を進めている。本拠点では如上の新専攻もしくは新研究科とこの新学部構想を連動させ、学部から大学院博士後期課程に至るまでの~~総合~~的な専門教育のカリキュラムを策定する。

＜背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等＞

現在、アジア各地では近代化による遺跡や文化財の破壊・劣化が進んでおり、また本拠点が対象とするローカルカルチャーは意識的に~~喚~~なければ散逸し、そのまま~~消滅~~してしまうものである。しかしそれらを現存の形で、または現物で保存し続けてゆくことは事実上困難である。その意味で、それらをデジタル化し、残し伝えることが、現時点における最も現実的な方法であり、地域文化の保存にも貢献するであろう。本拠点で推進される方法論は、研究方面においてはもとより、日本政府の海外支援の在り方に対しても提言されるべき社会的有効性を持つものである。

| | | | |
|------------|----------------------|------|-------|
| 機 関 名 | 早稲田大学 | 拠点番号 | D 1 9 |
| 拠点のプログラム名称 | アジア地域文化エンハンシング研究センター | | |

◇ 21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

このままでは当初目的を達成することは難しいと思われるので、下記のコメントに留意し、当初計画の適切なる変更が必要であると判断される。

(コメント)

本プログラムは、ローカルチャーの地域文化からアジア全体の新しい研究方法を構築しようという大きな目標を掲げている。アジア研究に新しい方向を提起するものと当初から期待してきた。この間の研究では、フィールド調査で得た出土資料のデジタル化といった点では、所期の目的を一定程度達成している。しかし四川モデルの研究手法をアジア全地域に適用していく主張には、まだまだ研究の深化が必要であり、説得性に欠けると言わざるをえない。各研究所の研究分担者はまず四川モデルというものを十分認識しておくべきであり、その上で専門分野の研究を推進していかなければならない。独立分散の研究段階から、全体をふまえた体系的な研究計画へと適切に変更されたい。四川モデル研究では国際シンポジウムなどで日中の学術交流を果たし、たしかに水準が高いものになってきている。しかし、それが世界的な水準にまで達し、拠点化するには、欧米の研究者に向けて国際的な発信を続けるなど努力が必要である。四川モデルとか地域文化エンハンシングとかいう新しい言葉も、学界などで定着するには一層の努力が求められる。大学としても、現代アジア研究とあわせて新しいアジア研究機関を創設するという将来構想をもっているの、いままで以上に学内外の予算を確保するなど、支援体制をしっかりと作っておくべきであろう。